

取桑
糸
子
金
盤

特別
13
3633
54



特

門 へ 13
號 3633
卷 54

取組手鑑序



請曰野夫有功者夫ヤハニモコウノモノト俗書包カクシ

教誨亦復爾々獨奈イカニ近末方ニ

間左礼籍特述通人之寤寐コトニ

而已未嘗教誨之端實如塗土ハシニ

昭和三十三年六月八日
宮川曼惠氏寄贈

塗ホウテウダ附ツケ今イマ閱ミ門カド人ヒト東ヒガシ采シ之ノ此コノ編ヒラキ三ミ

教アサヒ垂ツケ々々在アリ人ヒト之ノ準ハカリ其ノ術テ之ノ多シ也

四シ十ジウ八ハチ手テ未ヘ也ダ愚ヲ兵ヘイ解カ百ヒャク術ジュツ

而シテ將シ將シ拾シウ八ハチ百ヒャク八ハチ町チウ云イフ善ヨシ哉ヤ嗟サ

鳴ナリ豈カ不ズ強キウ者モノ乎ナラ

取トル組クミ手テ鑑カン叙キョ

不ズ買カウ再マシ乃シテ御ミ見ミハハ人ヒト目メ也

火ヒ并ナヒ多シ也ダ録ロク戎ジュウ結ケツのノあア政セイハ

突ツキ出ダシ也ダ耻チ一イツ顔ゲン昼ヒル廊リウ乃シテ神カミ

酒サケ陶トウ也ダけケ々々塩シホ花ハナをヲ振フリ也ダハ

地チ名ナ取トル也ダ並ナヒ女メ壘レイ也ダ地チ名ナ取トル

樹背多る中入ぬ氣満ハ中吾
膳とお運び本中何きハ中三
何季表子と寐さ人と念ひ
客を投ぬれじと想ひ故
手と膝をして術と擢り

あつと年穿ハ思業柱を倚り
身子が足の通ひを賤き。
上艸履と容を勤申を許
寸糸謹裸ふ成ても床を
残遺を江戸ワ子あんと
僕切為る教訓の勸善元
をして丁悪と懲し周成

あゝ床入とまゐるら。土俵入
乃答西河岸と呼ぶ自身
番於行事贖鬼乃接
ふららんを頬ふ。眼
情於徒頬冠をさし
ふやぬふとや

先生の一坐丑島名正月
大黒と舞於初日横綱の
傳を受了関東采吉書



合 關 關 關
 同 同 同 同
 座 鋪 鋪 持
 附 周 申 三
 雜 部 屋 持
 西 河 山 序
 越 後 同 同 同 同
 方 前 頭 頭 頭 頭

當三月二日雨

氣 氣 氣 氣

天十日居後仕也

客 關 關 關
 諸 諸 諸 諸
 淡 黃 黃 黃
 且 那 那 向
 采 由 由 頭
 旅 人 人 泉
 息 字 字 株
 方 前 頭 頭 頭 頭
 近 國 伊 勢 江 戶 諸 諸

三舎目
床入後

柏木

古野川
在勝負来
傳

員借

木戸口之圖



頃ハ十月にころころのころころハ郭中をそのころころとて
火の用心のころころあけく中此所へ出たあつらんもまてくはく
おちやとひくもあれどころに大キ子女郎屋あり所すが
家能ともくむけおに中産ハ結るひんせとくまてこの
ゆゑんぞあつらんあんにあんにあんにあんにあんにあんに
引のころころあつると右画のどとさ客がらんせの大搭子く



のぞりややえごう一のうをくらういおくらさうくらをくんに
 のぞいこ居の内うらまきでれとすちやうたわけく
 トリよまごそ何やう
 後に作者系系を始
 ちりくくとすやま
 づまされどまんトめ
 る由(室)○ 玄冥のあらら奥の方をのぞ
 おあささだし中をのぞんがハヤウマク
 ちよごんと中のるの案とけいその奥が内ちやうふて亭
 全今角かろうゆりーと見て葉づけとたぶふから

亭全 凡のおらせいりでいぶ二階がさみーの
 比川ハ下産敷にきやぐんがあるうら
 今ちよらとえんけたけどうも利口か
 やうハ糸がうらまき
 女者ハアさんぶ皮附おとた
 ことけえんまりのびろくこと

さまのり 女房 コレ さたやりんぶよのわうう消
 りごり 女房 中居 この笑紙とちよらと
 たそごよまそーての聖もとねが角か
 いうらまきうらうノ弁あにめんを切ほめ
 といまごくおくようになんかにさうりそ
 くらや ちよけい紙ま
 中居 この笑紙とちよらと
 ごろうしで 女房 且那へモシイ 琴今浦の琴と
 いふ字に我ひさんの我の字と書てめん
 ようとやせね 亭全 フウ 琴今我
 かねたの時斗
 キリ、
 ナヤア二



横細床人之圖

客人取組手鑑

女即取組手鑑
 十文銭ハ湯屋の袂札にあらさるる扇子
 変トて笑おとれる戒を川の例瀬定なく
 國くに色町此数多一とせとも名をさるる京の
 崎系大阪の町江戸の吉系多り江口神崎
 船妻六古名名のみあり性昔より傳りてきた
 いろ里といふハ一不播及の室は二に大和乃
 本は三よ泉列堤の乳守といふはちありの

は初巻の巻末に於て
 此の巻の
 終りに
 ありし
 事
 の
 由
 り
 を
 記
 述
 せ
 る
 事
 あり

里にまよらハ大本巻とよにあり神来傳と
 してハ二十七八まよこのわくが振こ
 男今宵名ざーまよ揚ら奥巻のあらん
 今こみ川年ハ二十二三當時の手取まよ
 男まよ柔屋の息子に来傳が極まよ
 めのこ見えてより床柱に倚りてまよ
 揚枝まよのいづから額で来傳と見らまよ
 見ぬまよにまよのまよにうまよひまよに

宛ルくとまよがら 四 モレイちうところち
 らも益とおとーまよー
 ちうせにちうのとまよてまよの
 ひけらまよと教とまよハ作者 時考 つまよ負惜とまよ
 三十五六買こまよとつまよまよでまよまよ
 いまよあいらまよ柏本ハ多比お粉まよ
 まよまよつまよたまよんでまよ
 負惜ハ自惚まよまよと柏本まよ
 まよまよにまよ尤この川よりハ年二

こつちへいよこへまぶらふなはなはなとてあこが
さしめぬあつ

はなはなの上よそ初まといはちのれお
女悪者のいのだ。名て言。あ人名トこの

るゆの東へのびまこと三人まき産女とてしららあまをまぶ
こつちへいよこへまぶらふなはなはなとてあこが
のぞいてや二の中の中のゆりまぶらにのぞいて入てハまの
たのまうぬのとらぬおせことら子○客人とち初のもれ
ど二の女郎のざさあまりよあつふおの末傳を
わらうあつこつ家のぬうちとあまにさこと惜り秘をさまら
[ちま]ヲホミヘイみまぶらふおざりままをアノ子や

おてうーとゆつとてあつこのあつとせ
おまやあめーのくろくろくぞよあんにまぶ

ね緒をあげんそうぞトせてせりあを
あうり(ど)をがら花いまん

と糸履がからを見(せ)せんによあつと

所トせておいおあつとまんト
と

よくそりまらつてあはハハにえまののが

中庭(お)ちをさうろつちの中わどにかがらが
ういんにんまのまの上げ

こらんあつちのまがひ
こらん

たによろろ、まは、ちりまねいト中不
た

どのぞくと初あちの女あ、びままやく
初あ(目)をくりむちく、まぢく、

サトバウ【ふる】にマウのあうごの誇【負惜】
てめへの身がうとしくさうさう【ふる】
あんでさひまをとく【負惜】まづこんさうが
川【ふる】あまが見まをといふのんでよまうはじ
つゝいひく口をうがかんとうさう歌【ふる】はち
うらうやこのころ神【ふる】同まが祝【ふる】（かち）
らんべいさう【ふる】異【ふる】らうぬくくをくさうと
なけいさう【ふる】あまのあやくろはとくさう【ふる】

ろ【ふる】籠【ふる】いふあうつさ【ふる】留【ふる】がやうこ舟のみ
よーといふあう【ふる】ごせ【ふる】【ふる】おま【ふる】おま【ふる】
さん【ふる】のたま【ふる】の下【ふる】孫【ふる】アノ子【ふる】及中【ふる】アノ子【ふる】竹村【ふる】
のまの【ふる】ありぬ【ふる】さの【ふる】アノ子【ふる】アノ子【ふる】是代【ふる】
のよ【ふる】だん【ふる】を【ふる】ホ【ふる】ニ【ふる】【負惜】ウ【ふる】お【ふる】ま【ふる】や【ふる】が【ふる】ま【ふる】こ【ふる】ト
は【ふる】と【ふる】つ【ふる】こ【ふる】む【ふる】【ふる】あ【ふる】れ【ふる】そ【ふる】り【ふる】ど【ふる】ふ【ふる】め【ふる】の【ふる】ま【ふる】ま【ふる】く【ふる】人【ふる】
が【ふる】ま【ふる】り【ふる】【負惜】大【ふる】ま【ふる】な【ふる】ま【ふる】が【ふる】ま【ふる】べ【ふる】り【ふる】ま【ふる】が【ふる】ま【ふる】れ
る【ふる】ぜ【ふる】【ふる】ホ【ふる】ニ【ふる】あ【ふる】ら【ふる】ハ【ふる】口【ふる】が【ふる】ま【ふる】ま【ふる】ま【ふる】ヨ【ふる】リ

ト出てりおとく 圓ハ大のふねもこ也 柏木がぎーまき
あふけていふまうく おれよおととこにちひる一床へ
おとくハあちこち一て申んとかうやーと鼻息あつく嘔
の独つきのどく せうがの申で痛がり記さう枕と
右よあさうり左よあさうりおとんの中へいれておいて鼻命
代とよあやん一いつとさうり下てさんでえんさうり
おとくさるる骨を袖へあまひ鼻とんさうりせささうり
とさうりおとくさうりさうりさうりさうりさうりさうり
のんがうりたかおんとつさずさうりあそこのけふ痛てまじら
うどの夜よのたんあうりさうりさうりさうりさうり
おれくさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうり
あさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうり
てさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうり
をくりさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうり
にたんよりさうりさうりさうりさうりさうりさうり
ともをれとあさうりさうりさうりさうりさうりさうり
柏木 一や

このさん、あさん、おのりんだの あまきととここ
がうりさうり

袖置えんがう モシ、おやさん、おさうりなんさうり

せまのこのさんのまやぐん子さうりさうり
酔さうりさうりさうりさうりさうりさうりさうり
りさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうり
床の香煙椰子のようかおとくさうりさうり
まんまうらモウく子怖かーたさうりさうり
らあさうりさうりさうり 柏木 せんがー一さうり

くらしらむとちもいかにたかひにたかひに
たよやぢうくうあひよあんにんのもう
コリアアアなんでおさうりやまよよさうりまを
ゆが十地さんのまげりけるところであり
まうたらけぢうはまぢうたんにたか
ぢまうきんがるのぢうて又あうきんせう
まらとゆつげくおひくくんにんーあま
まきんくートウノ青肩惜せまうぬあうらぬま
ーあれともうたき川かぢうらう

よをあひがあいきやうあうて去々年のつき年一にて年ハ
すう十八九あり肩惜が痛く居らさかくにおりけり
志くもりまんだの志やうとて又つあそたまうんで居る
○たむこそまい付てだうあかのとんてあひまぢうぢう
肩惜 まじい にこそまい付てく 藤ハどうぢう
柏 まんがこと
うきかうら いつそモウ月がさうらうで戸
のまきらうらまぢうらうらうらよまうさう
あやうのアレ不そありのいせ肩 ぢまうら
つけくくんにん 柏 たむこあんにん 川
よまぢう おあがんにん
まらちやアたらそおついせ 肩 赤イ玉に

化^たぬぢぢおあまあゝーたゞーおめーうひ
るがあつておあさだのうゝらぢね^相
そんなるのハぢんぢのせん^圓ユレ^顔と
ぬいこいら男とさうもぶらうてんを
るゆもぬい^相それでもアノぢんぶ
せんめのと^圓ぢぢぢおあけりて^相志
げとつらぢらハマラちらうぢらハ
おぢんせん^圓何のころとあけりて^子亮

があつてアノぢぢのうゝらぢぢ
が^かあ^まあ^くもぢぢ大^か根^の名^な代^{だい}とぢぢ
た^らう^う^相あ^んだ^んま^と^圓又^キあ^いよ
あ^つて^くま^るよ^つぢぢぢぢ^キヨイト^相
ぢん^ぶま^とさ^うが^よま^をあ^めの^ぢと^らて
た^いい^いに^して^おく^んあ^んし^てあ^ぢぢ^圓
七^ぢぢ^のい^のぢ^扇や^ハと^んぢ^ぢぢ^ぢぢ^ひ子
^相中の町の葉やハ一ぢもぢんぢのせんよ

員 此全盛のころつらつらそのまづぶサント
あの地蔵のまづかんつもさぶみであま
うりりんごの柏 客人と海客とせま
そと見おにもあつまハいつそせつ
たん屯員シタカゆ方に柔毛で一巻を
なとまハハのう柏 氣のとくでま
員 くらびでハ女がふまろくさどドつむの
ころころろろス員 柏 とよにおつせん員 い

おのん中をどいあまれむびまころつ
いのらあつこのおぶねとやらのホニ
ぢうとてあまんまとまふさぶがむ
にあつくいらのがらよとおつても
のがくもせんせんちんごんまうま
とづてうらつを怖あつらしてや
るが堀の四さん一願がけがあつて七年
はまきこやうがまかりんまうつらでん

あめふ は川 ヲヤ中ぶおらのせんねと
まじく中らにあらう居て何うあつとよ
うさうめあくちやまそせしめよおにらり
里山さんへせんじのあしつふし
まやうよモレイ 映 日ハ卯んの三十日
おざりのまうねい 束 コウト小廿四おち
つきふいたと 束 束信
おのりとも用あうあしなせい 初
おらあけのうじんまさうららま

揚枝とらうらうお出あんを子捨をらと
どうもあいのんぞおざんをよトレ
ちへお出たなんー中とたがふとらう
ト揚枝とおへあう 束 今のあつんせか 四
アレカへどうもつさーもの多いまやあんハ
どうもまみだんをよ三浦やおいで
なんしたあうらおとひつさ合さ
ちうが と お出なんしたのと今あんの

りのとりつゝ付届つひの夕ゆふがまのうんた
のサさとももも女にははええたたいいててなんんととら
おおめめんんああややととおおめめいいののささく
てておおざざりりいいまま ㊦ ツツリリヤヤアアおおめめいいののここららいい
ううららそのその客きやく人ひとががええうういいままむむままいいねねいい ㊧
ああんんぶぶおおつつううああららせせいいてておおああんんをを
ののごごよよ ト夜意の中へ入りこむ事しにひちりえ
のいりどがちりすら白をあしぐちるを色男
の目がち ㊨ ねねねねつつてて孫まごよよととななささりりいいまま

ノウノウめめちちららんんととイイツツソソ孫まごららららいいおおんん
たたんん いざうたたががままててぐぐららてておおざざんんをを困こむたた
ががままひひいいままををぞぞるる ㊩ モモししそそんんをを
るるややととおおつつせせいいててももををああせせるる とてああいいでで
たたんん いざうちちががららいいららハハワワララ
ここららいいおおささげげああららいいててななららいいおおいいぐぐ
たたんん いざうままててよよ ちいさなににくくひひののうう ト耒傳う袖口を
ニワクをてよと
ききいい入入ににののううぞぞののああららいいひひとと ㊪ トトいいつつららいいららいい
ききいいああららいいひひとと とて ㊫

ぐしせの ○子曰巧言令色鮮其仁

言と巧にしてるのひ笑た顔色

と令どる類の人ハ仁義の心けつして

鮮のなりと聖人孔子の仰なり

トよろしくけの 論語とよむ 川あんたらモウこらりのせん

一 束 初ううつてハ花がねのの

○子夏曰賢賢易色 御門人子夏

の曰らんハ人徳と好いと祓がこくハ色

と好に心を用がこくたのる

川 ぶまらうをまへ 下とひつこらよ

ウただことおわがんあんをねいナツトミ

せるとらりわけんまや 束 コレサこつ

ととれちやアも持ぶゆはだ 川 ころ

不どよがありやアよよおざりいをハレサ

ついでおわけアイをよちらとこれとおあ

がんあんしてころうぶの 一 下やものそつ

ただこ入くらう

まことによき一たんした時ひつくく乃
客人で受けまいにハゆりめんをと柔
をいにらうつらうひいたにあらちく
らおどなさんてころちつハおどなさんせん
でハちざういせん集りまけとひも自
惚ぶれら集の集何もコウ妙たぐりも祿
へぬりへぬハ糸町へおどなさんまとりふ
ふいとまうくめりりたがらんえく

糸町まやアハ女おんな流りゅうがでまひした子
をいよの琴ことおさん上うへ總さきやの糸結いとむすさん
かんぞいこのつとりのさ集千ヨツト見
せかおめのの髪かみハアノたのむまびうとこ
ひやうごがや集髪結かみむすにそろうつとく
そろうい志よ集人の糸もあらぬいで
こんかろりといふでもねくを集アノお
中なか一さんがかくおくらのるにかタリと長持ながぢの
音ねとあいぐりて

アヤとておが火ハア 絨川仕入の だんとう モシ

火折袋と平くろちくと折袋のちろろ

お火とあけパイ あや トありえん其の火入へ
火と二つ二つ

川 火のちろろ
とついでみろつろろ
あとのけに寝てろろ
すけおこんたろろ

川 たろろ
たろろ 川 たろろ
たろろ

川 たろろ 川 たろろ 川 たろろ

ておさうせなせの 川 たろろ 川 たろろ

あさうろあでもよぶざん 川 たろろ 川 たろろ

なんー 川 たろろ 川 たろろ 川 たろろ

川 たろろ 川 たろろ 川 たろろ

川 たろろ 川 たろろ 川 たろろ

川 たろろ 川 たろろ 川 たろろ

川 たろろ 川 たろろ 川 たろろ

川 たろろ 川 たろろ 川 たろろ

川 たろろ 川 たろろ 川 たろろ

川 たろろ 川 たろろ 川 たろろ

川 たろろ 川 たろろ 川 たろろ

川 たろろ 川 たろろ 川 たろろ

おさげしとあんなくならうお出らんを
うらあんにあまらうていとつちやあざん
せんは困なんといまれてもころちが
まらうつうら論ハ女のサ回なんがと
たらくうよあまらういせんあのごと
て袖笛こらうどくなんどのよまに
ておらんなんをさハおざりいせん一夜
のやどとりうこまにあつておいであ
まののよあせんころちうごらん
ころちうとげやされいとおまさん
でハおざりいせんころちうあさあて
りんまけきどおつらんあまおざら
らあうおざんをモレイうあびおあ
この女ぢいろうろあしやのとあうくおさいなんた
ふがわらうていつくおらんあ困んハ
ナニめつていほけつてとせんなるハ

ままの
 の大い
 大門へ
 いたい
 らぬ五
 十回に
 てた
 るり

ねいのさ名深のぬの池（争）扱（こ）みやア（あ）あ
 なるく大（か）とあつくぬくお目り
 うけより 四 イ早く子（た）くおゆーやさ
 なるさあゆで能（た）ぐりでおさりのま
 集 おまあぐれべらぐりこつてあま
 川 かんにおまへさんハ集 ぶふまふま
 くとあつてこの四 五、あまふまふま
 さいまよ 集 いろく一（ち）及ハまうるせうい

ありまの松 井 四 又くりのまふもあま
 さいまゆうぬ 集 ア、ちつと集よふ
 川 アノ子 ちんぞうくいとゆもお
 さんまうら トワくうらくあんとかかちあわとい
 いまが花のトくうらとたんとた
 集 こつちのゆがまごつくくうら 四 ア
 まらなんーソレよまをハ（小）ぞいっつそま
 ーいよトくらと 角力の大鼓 ドテソク
 々々々々々々々々々々

評 びくー女郎のゐる内ハあんじうの
壺ーやう禿くろのたまを席うきの墨かまやうそ
あれーより今ハあまといふや絶
たり千柳せんりゅう点てんにひまうとくのあいの
とやうもうもくしうと是半はん可通かつうの
先まへありにこく洒落しやれ本ほんでも書かたぐら
人ひとなり額ひたいとぬの客きやく多くハは徒このと
たぐ右みぎの負お惜あや買いこたうとといふれ

なれども実ハ女郎の情じやうに疎うとー
かよふの客きやくちつとあまいことなをけ
らぬると用もちもたきまに格子こうしさくらぐ
名なとよんでハ連つれをどくこしとめち
つとあらうぬくぬくと禘ひざりたぐら
ありこらんをさやくところの内うちできさう
とよみお又また柏木かしわハは川この川よりこぶん終はつ
下くだもなれども容よう負お人ひと形かたちの如ごとくま

いとおとろしきことおどけるにいな
づんぐまらよに客あるべしは夜
の取組員惜ま強に思ふれども
思ひの外つめりくそくらり
まらひでいりりごうしそも二十
うらのおいらんハヤゴ駐りしが板
ぬかまり員惜ぬら付きらつそまを
の息子に柏木もまらごらごらごと

まらひとまらひは川で死なえの
ゆらハ却て買よにものありは客
たごまにぬもぬのくつぬ日
考へて死にさう初ら暮の十四
五日あま二階に死なぬのゆ法の
ある頃にもらとまらぬ客あり
柀色の道ハ唐天竺同屏以来日本の
當年今日まらごらごらいとい皆

迷ふより去れば思業の外と金言
あり人召命の言んたくといふ事
ゆくてはうらねば分相意のたのま
たる事あるまどといふまのては分量
かゞうらうらむらうらさるのされば
女郎のうらハヤつをり惚るあり
け家好ことありよりぬにならうと
ありよりこのあらうの外ありまやう

一交嘆でんふんよりうけり
是と肩惜のど兒客ハふとい女と
ころくしひ来傳ど兒沢ありハ嘆
なり初會にいふと惚らうとも
実が又せうらめりてや一先あ
るりくありうらうらせ名傳
上の誠あり右は川は夜来傳
初にせうら初に認るを禱

居りたるものなりこの客もあは
事りしりて入る名代と
らせ下ざりまにハあんなぞ買
よふと実ありうれと来傳とゆん
ざしでも句くおもふら彼大
るの客ハおつこつて来傳が
う座をとりせむ都くやうく
わけて事んたるをこころやと

うれーがせらるるゝいづま
もむづーと客のおら合らりぞ
そらうく晩あるべきにうらうの
けがらうとえんせと後に下よこに
うらうく時來傳がさるる
よふととんとりそれより折出
るの志こるしつるに火をゆれ
とたせとらうきゆる情実

にけ家の園取あしん末傳 咄び
のよふま家猿も白魚もくつゝ客
と見えれども明方にけ川にゆらく
よ先でやれハ土俵際て足が
おぐらさやまりのありまきとにけ
川が騒さなるべし是よりけ川ハ
末傳にべらぶらめといふるがうれ
まじよふにあり末傳ハくくぐ中が

女郎くさい香がしきく屋も夜もけ
川が声が耳で鳴よふに右の金と
つふ客ハ色どどの仕送り金とあり
付彦補のと名あいつさ出されて月
がそんり末傳ハたよいもあの人に
成べし又とけ角力勝負かし嗟
一唱三歎なる哉



大尾

u 5416

